



今週いよいよ 体育大会

校長 小木曾敏樹

毎日朝早くから頑張ってきた体育大会が、いよいよ今週に迫りました。チームパフォーマンス(応援)もほぼ完成に近づき、声の大きさもどんどん増してきたように思います。

ところで、学校はなぜ運動会や体育大会といった行事に取り組むのでしょうか。

それは、学校は学習塾とは違い、集団で学ぶところだからです。勉強はもちろん、人間関係や、集団の一員としての働きや、規律や道徳性、思いやりや我慢、いろいろなことを集団の中で学ぶところだからです。

集団の中で、教え合い、支え合い、助け合い、時にはぶつかり、そして分かり合い、互いの思いを分かり合って一つのことを成し遂げる。心通じあえた瞬間、そこには、感動があります。多感なこの時期にしか味わうことのできない感動もあります。

私は生徒たちに、より多くの感動を味わわせたいと思っています。精一杯がんばり、仲間と心通わせ合い、困難を乗り越えた時に流れる涙を、存分に流させたいと思っています。

この文章を書いているこの瞬間、グラウンドでは3年生が「1・2・3・4・・・」と大きな声を全員で出しながら、大縄跳びをしています。最高記録を出したと、みんなで喜び合っている声が聞こえます。他のクラスの頑張りに拍手するあたたかな音が聞こえてきます。感動の予感です。ちやくちやくと生徒たちは、簡単には手に入ることができない「感動」というゴールに向かって近づいています。

体育祭ではなく、体育大会。祭りではなく、生徒の精一杯頑張る姿が主役。感動の瞬間こそが一番の輝き。保護者の皆さんと、輝く生徒たちを見とどけられるまで、あと5日です。

体育大会の思い出(2)

中学3年の体育大会、中学校生活最後の体育大会は、とても思い出深いものだった。中学1年の体育大会があまりに悲しいものだっただけに……。

私は放送委員会の委員長をやっていた関係で、体育大会でも放送の責任者を任せられていた。放送はテントの中の仕事だし、責任者となればずっとテントの中に入れられる。これはラッキーだ。(昔は団席にテントはなかったの……)

しかし、これが大間違いだった。

中学校3年にとって最後の体育大会は、本当に特別なものだった。団席はすごい盛り上がりで、楽しそうだった。一つの競技が終わると感動があり、他学年を応援することさえすごく楽しそうだった。自分も団席に行きたいと思った。

極めつけは、閉会式だった。勝ち負けに涙し、勝ち負けを超えた感動に涙する仲間たちを、私はテントの中から見つめていた。団のリーダーと応援団長、この2人のリーダーの号泣する姿に、何人もの仲間が集まり、何とも言えない感動の輪が広がった。「なんでオレはあの輪の中にいないんだ。」握手し、抱き合い、肩をたたき合い、感動を共有している仲間たちを、ただただうらやましく見つめている自分が悲しかった。今さら、その感動の輪に加わることは、なぜだかできなかった。ずっとテントの中で働いていた私の少し赤い顔と、ずっと外にいて真っ赤に日焼けした彼らの顔は、交わってはいけなような気がした。感動の輪を見つめながら、私はテントの中で機材の片づけを始めた。

すると、感動の輪の中から、団のリーダーと応援団長の二人が、テントの中で片づけをする私のところにやってきた。泣き腫らした顔で、私の手をしっかりと握り、「ありがとう。お前のおかげで最高の体育大会ができた。ありがとう。」と。

感動の輪が散らばり片づけが始まったころ、一人だけ涙を流している自分が恥ずかしくもあり、誇らしくもあった。